

# 現代(英米系)倫理学の諸テーマと キェルケゴール

京都女子大学

江口聡

# キェルケゴールは古い？

- 実存主義ブームははるか昔。キェルケゴールはもう古すぎて(世俗的な)倫理学では使えないような・・・
- しかし問題意識があんまり古いと、思想史的価値しかないということになってしまう。

# 教育と研究の場での本音

- 「倫理学概論」などの授業のスタイルを、プラトン→アリストテレス→アウグスティヌス、といった思想史スタイルから、コンテンポラリーな議論と具体的問題を参照したトピック別に変更。
  - その方が学生の興味を引きやすい。
- しかしビッグネームに押されてしまって、キェルケゴールを入れるスペースがない！（→そしてだんだんキェルケゴールを読む時間が減って行く・・・）
- 他の研究者と共通に関心あるトピックについて議論したい。「キェルケゴールによれば～」と複雑な立場を最初から議論するわけにもいかない。

# キェルケゴールは古い？

- 世界中の研究論文も入手しやすくなって研究スタイルも変わった。全体像を掴むというより偉大の哲学者の個々の論点の成否が焦点に。
- 「偉大な哲学者から学ぼう」というスタイルから「問題に直接に当たろう」という研究スタイルへの移行。
- 研究者があらかじめ持っている問いへの解答の探索としての偉大な哲学者の思索の問い直し。

# 喧嘩も売りたい

- 場合によっては偉大な哲学者に喧嘩を売りたい。  
(ホッブズ、ロック、ヒューム、カント、ミルなどは常に喧嘩売られて限界も確定され、解釈を叩きなおされて再生しつづけている)
- ホッブズ→ゴージェ、ロック→ノージック、カント→ロールズとヘア、ヘーゲル→チャールズ・テイラーetc.
- たとえばカントの場合は目的論的発想や二世界論がいったん括弧に入れられて、普遍的立法のようなアイディアが生き残っている。

# 棚卸ししたい

- こちらへんで棚卸ししてみるべきか？（個人的には今後どの程度リソースを投下するか迷っている）
- 非常に多様な側面をもった哲学者・文学者・宗教思想家なので、いろんな側面から棚卸ししなければならない。私の場合は「現代の倫理学のテーマ・関心からすると、倫理学者としてのキェルケゴールはどこらへんにいるか」を確定したい。

# というわけで

- なるべくコンテンポラリーな議論の文脈でのリソースとして参照したい。そして弁護したり批判したりしたい。
- もちろん、キェルケゴールの立場を解釈するだけでたいへん。
  - 今回は解釈せず、問いを投げかけるだけ。若い研究者に期待。
- キリスト教倫理家としてのキェルケゴールを無視するわけではないが、あえて一時棚上げ。

# なぜ英米系？

- 問題への直接的取り組み。
- 分析と批判。明晰さ。⇔ 独断的、曖昧なものへの嫌悪。
- 集合的研究姿勢。小さなことからコツコツと。
- 大量の二次文献収集。
- 小人物でもなにか仕事ができる。

# 戦後のケルケゴール国内受容

- 基本的には実存主義の祖としてのケルケゴール内在的な解釈、あるいはキリスト教を土台にした解釈が中心か。
- 河上(2000)。名前があがるのはハイデガー、アドルノ、ヤスパース、レーヴィット、レヴィナス、デリダ。和辻哲郎、西田幾多郎、三木清。ケルケゴールが直接影響を与えたことが明確な人々。
- これらの哲学者の名前が英米系メインストリームの倫理学者によって参照されることは残念ながら少ない。
- 最近の倫理学者の間では「大陸系」と「分析系」というミゾは小さくなったようにも思えるが・・・(ケルケゴールのアイディアもこっそり参照されているのではないか)

# 注目のキェルケゴール研究動向

- 方向性としては Hannay & Mario 1998収録の論文のいくつかが興味深い。
- 特にC. Stephen Evansの “Realism and antirealism in Kierkegaard’s *Concluding Unscientific Postscript*” と Robert C. Robertsの “Existence, emotion, and virtue: Classical themes in Kierkegaard”、M. Jamie Ferreira, “Faith and the Kierkegaardian Leap” あたりは注目。

# 多くの倫理学者の基本的欲求

- 多様な価値観のもとで、できれば非宗教的、世俗的に、できれば議論の多い形而上学を控え目にして、経験的に実証されることからもとづいて、「正しさ」「正義」「善さ」を規定したい。
- 倫理学の独立性と進歩。
- 価値の分裂(Nagel, 1979)。道徳的責務、権利、功利性、完全主義的目的、個人的献身

# 倫理学の進歩

- 「近い過去まで、(非宗教的)倫理学を生涯の仕事にする無神論者はほとんどいなかった。…多くの人々が非宗教的倫理学を体系的に研究してきたのは、おそよ1960年以後のことにはすぎない。」(Parfit, 1984)
- 「詩人や脚本家はホメロスやシェークスピアより有利とは言えないが、後の時代の哲学者はそれ以前の哲学者より有利である。というのは哲学は進歩するからだ。」(Parfit, 2011)

# あらかじめの注意

- ケルケゴールの美的、倫理的、宗教的、という区別について。
- 今回問題にしたいのは、ケルケゴールの用語法では「美的」であれ、「倫理的」であれ、「宗教的」であれ、とにかく最強・最優先の規範、当人にとって最優先となるような「理念」を問題にする。

# 倫理学の自律性・独立性

- プラトン『エウテュポン』問題
- ソクラテス:「行為は神が命じたから正しいのか、それとも正しいから神が命じたのか」(正確には「敬虔」と「神に愛される」だけ)
- (1)もし行為が正しいのは神が命じているからだとすれば、神の命令は根拠のない恣意的なものになる。また、神が善であるという信念もトリヴィアルになる。

# エウテュプロン問題

- (2) もしその行為が正しいから神が命じたのであるとすれば、正しさの基準は神の命令以外のなにかである。
- したがって神の命令説はうまくいかない。
- より詳しい議論は Shafer-Landau 2007収録の諸論文を参照。
  
- トマス流の自然法思想も、基本的には「理性」によって発見されるもの
  
- → 倫理は宗教とは独立。キリスト教倫理も簡単には受け入れられない。宗教的信念とは独立した正邪の基準が欲しい。

# (英米系の)倫理学者たちは何を議論しているか

- 記述倫理学: 人々はなにを正しいと考えているか。(← 主として社会学者・心理学者のテーマ)
- 規範倫理学: なにが正しい行為か、なにが善であるか、といった規範的な問いに答えようとする。
- メタ倫理学: 「正しい」「善い」などの語、あるいは「～はよい／正しい」という文はなにを意味しているか。
- 応用倫理学: 具体的な倫理的問題を分析する。(できれば解決への方策を探る)
- この区分は実際にはあいまい。

# 標準的な倫理学の教科書

- 標準的な教科書(Rachels 1999など)では、メタ倫理学の基本トピック、功利主義、義務論、社会契約説などの規範理論を紹介。
- 古典としてはアリストテレス、ホッブズ、ロック、ヒューム、カント、ミル。20世紀のものではロールズ、ノージックetc.
- 最近ではこうした中心的な学説に対抗する形で、「ケアの倫理」や徳倫理学が勢力を伸ばしている。

# 規範倫理学

- われわれはどう生きる「べき」か。どんな行為が正しいか。
- 何に価値があるのか。
- こうした問いに対する答とその正当化、基礎づけ。
- どんな規範理論が有望か: 帰結主義、義務論(非帰結主義)、契約説、徳倫理学、直観主義。

# メタ倫理学

- 道徳判断に用いられる語や文の特徴はなにか？
- そもそも道徳とはどのようなものであるのか。
- なにに価値があるのか、価値があるとはどのようなことか
- 道徳的な知識とはどのようなものであるのか。
  - 自然主義、直観主義、主観主義、相対主義、客観主義、实在論 etc.

# 両方にまたがる問題

- 宗教と道徳はどのような関係にあるのか。
  - 宗教的信念がなければ道徳はなりたたないか。
- 道徳的な責任とはどのようなものか
  - とくに自由や決定論との関係はどうなっているのか
- どのような存在者に道徳的配慮が必要か
- なぜわれわれは道徳的であるべきか

# 規範倫理学

- 「正しさ」rightnessをめぐる問い。
- 基本的には 功利主義 vs カント的義務論 vs 契約説という図式。
- ロールズの『正義論』以来、「正義」justice は特に注目され続けている。他に公正、平等、権利、社会的自由 etc.
- キェルケゴールはほとんど姿を現わさない。  
(ヘーゲルやマルクスも登場しないのでしょうか)

# キルケゴールの扱い

- 教科書にはほとんど姿を現さない。
- A. マッキンタイアー(McIntyre, 1967, 1984)では極端な主観主義者、決断主義者として紹介。理性によって道徳性を論証しようとする啓蒙主義的試みが失敗に陥いるという分析を提示した哲学者として解釈される。

# キェルケゴールの立場は？

- 規範理論に関してどのような立場にいるのか？
- 彼自身(あるいは偽名著者たち)が「倫理」と名指すとき、義務論(非帰結主義)的枠組にある義務のシステムを指しているはまちがいなさそう。この際、ほとんどカントを受け入れている？

# 現代の規範倫理学に対する キェルケゴールの影響

- 「正義」といった社会的な規範にはあまり関心がない？
- キェルケゴールの政治的に保守的な面も受けいれられにくい原因。
- (ただし大衆社会批判者、政治的保守思想家としてのキェルケゴールは興味深い。政治哲学・社会哲学・社会学などの関心対象になりえる。)

# 現代の規範倫理学に対する キェルケゴールの影響

- 偽名著作群は、そもそも規範的主張としてなにを行なっているのかがわかりにくい。
- いわゆる建徳的著作群ははっきりした規範的主張を行なっている(ex.「汝隣人を愛すべし」)が、その正当化根拠はすべて聖書におけるイエスの命令。むしろイエスの命令が含意しているところをときほぐし拡張している。
- したがって読者は「なぜイエスの命令に従うべきなのか」と問わざるをえない。これに対して、「死後に罰されるから／報われるから」という答を返すならば、本当に重要なのは自分の幸福ということになる？

# 行為者中心的倫理学

- 80年代から従来の規範倫理学説に対する対案として議論されているのが行為者中心的倫理学 Agent-centered ethics / morality。
- ⇔ 行為(規則)中心的倫理学、帰結中心的倫理学への対案。
- 功利主義と義務論という規範倫理学の二大派閥は、行為のみに注目してきた。「どう行為することが正しいか」が問題とされてきた。
- しかしむしろ、「どういう人に私はなるか」が問題だろう、と考える。

# 近代倫理理論の分裂病

- Michael Stocker (1976) “The Schizophrenia of Modern Ethical Theories”
- カントや功利主義に代表される倫理学理論は、義務や正しさに関心を寄せすぎ、また理由や正当化のみを扱い、動機について十分注意を払っていない。動機と道徳的理由とに引き裂かれ、分裂病に陥っている。

# 徳倫理学

- アリストテレス的徳倫理学。アンスコム、フット、マッキンタイアー、ハーストハウス、スロート、クリスプなど。
- 行為ではなく、望ましい性格特性への注目。
- 行為の帰結よりも、行為者の動機や道徳的一貫性 Integrity の優先。
- 人間的な幸福と人間的価値（友情、愛、誠実etc）の重視。
- キェルケゴールの場合も愛と情熱を人間の基本的価値と見ている？（他にも候補はある）
- Robert C. Robertsの各論考に注目。特に “Existence, emotion and virtue: Classical themes in Kierkegaard”

# 幸福・善い生

- 「幸福とはなんであるのか」についての規範的議論は正しさについての議論とは別。
- ロールズ以降、「善」の問題はしばらく棚上げにされてきた。（「正の善に対する優越」）
- しかし80年代なかばから議論が再び活性化。

# 幸福・善い生についての議論の枠組

- 快楽説か、欲求説か、客観的リスト説か。
- 快楽説: 望ましい意識経験のみが善である。(ベンサム、ミル、シジウィック)
- 欲求説: なんらかの欲求の実現が善である。(ハーサーニ、ヘア)
- 客観的リスト説: 人間が望む(べき)客観的な善(複数)がある。快楽、健康、自由、知識、愛、友情、遊び etc.特に活動や達成。(アリストテレス、ヌスバウム、セン etc.)
- 注意: ある状態が幸福な状態であることに議論はない。むしろそれが善い状態であるのは究極的にはなにに依存するのか、という対立。

# 幸福・善い生についての議論の枠組

- もとは古典的功利主義が依存していた快楽説への批判。
- → 快楽にかえて欲求（特に合理的な欲求）の充足を重視する立場が提唱される（1970年代）→ 数々の難問が提示されてほぼ潰れる。
- → 快楽説の見直しと客観的リスト説の再評価。
- 特にアリストテレス的エウダイモニズムに注目が集まっている。

# キェルケゴールのSalighedは？

- 『後書き』でのヨハネス・クリマクスが「情熱的な無限の個人的な関心性の内に存する」とする「永遠の浄福」とはどんなものであるのか。心的経験や心的状態？なにか活動や状態？
- 「無限な関心性」そのものは自分の幸福に対する欲求と解釈してOKか？

# メタ倫理学

- 道徳判断に用いられる言葉の意味、道徳判断の本性などの研究。
- 「われわれはどう生きるべきか」ではなく「べきであるとはどういうことか」
- G.E.ムアの『倫理学原理』(1903)以来、1970年代まで倫理学者の大半はこればかりやっていた印象もある。
- 「なにに価値があるのか」ではなく、「価値があるとはどのようなことか」「価値があるからわれわれが求めるのか、求めるから価値があるのか」

# 「よい」「正しい」は何を意味するか。

- 80年代までの教科書では:
- 自然主義: なんらかの自然的な性質(たとえば「快樂をもたらす」)を表す。
- ムアの直観主義: 直観によって知られる超自然的な性質を表す。
- スティーブンソンの情動主義: 感情を表出し、同時に他者に影響を与える。
- ヘアの普遍的指令主義: 普遍化可能な命令。

# キェルケゴールとメタ倫理学

- 「美的著作群」と建徳的著作群との差異。
- 実名建徳的著作群ははっきりした規範的主張を行なうが、偽名著作はそうではない。
- 偽名著作におけるキェルケゴールの関心は、むしろメタ倫理学的関心と呼べるのではないか？
- 道徳的な思考ではなく、道徳的な思考を行なうことが当人にとってどういう意味をもつかという考察。

# 主観主義 vs. 客観主義

- 道德判断は主観的なものか、客観的なものか。
- 現代倫理学者にとっては古い問いの形。
- ふつうの倫理学入門書等でキェルケゴールがとりあげられるときはかなり極端で単純な主観主義者としてあげられる。(ex. マツキンタイアー『西洋倫理学史』)
- しかしたいていの倫理学者は、なんらかの形の客観性と規範性を信じている。

# 単純な主観主義がだめな理由

- われわれは倫理的判断において誤ることがあるように思われる。
- 道徳的な意見の不一致・対立が説明できない。
- なんでもOKであれば、自分の道徳判断について悩むことが無意味となる。

# 注意

- いわゆる「実存三段階説」には注意。
- 一見すると「美的に正しい」「倫理的に正しい」「宗教的に正しい」は別のものを指しそうだが・・・
- 倫理学者が考えている「倫理的判断」は、その人が本当の意味で選択するべき、最終的な判断を指す。
- 「私が従うべき理念」そのもの

# 最近はもう少し整理されて

- 認知主義 vs. 非認知主義
  - 「徳は知であるか」
- 実在論 vs. 反実在論（表出主義）
  - 「客観的な真理は存在するか」
- 内在主義 vs. 外在主義
  - 真正の道德判断を（誠実に）下したり、それに同意したりした人は、それを行なう動機を必然的にもつか？という問題。意志の弱さの問題。
- どれもキェルケゴールのメインテーマの一つ

# キェルケゴールは何主義者？

- 偽名がどういう立場をとっているか
- ヴィクトール・エレミタ: 単純な主観主義者？
- 沈黙のヨハンネス: 単純な神の命令論者ではない。
- ヨハンネス・クリマクス: 反実在主義者？  
(Stephen Evans (1998)は実在主義者と主張。)
- アンチ・クリマクス: 神の命令主義者？
- おそらくこういう分類を試みてもあまり益はない。  
むしろキェルケゴールが何と格闘していたのが興味深い。

# キェルケゴールの独自性

- 倫理的な「真理」についての格闘。
- 倫理的判断の規範性への注目。→ 規範的でない判断への疑惑 → 規範に従わない／従えない実存への視線。
- なにが倫理的な真理であるかについて語った哲学者は多いだろうが、倫理的な真理がどのようなものであるかを考察しはじめた最初の一人？（思想史的研究が必要）

# キェルケゴールの根本的な問い？

- 「倫理的判断を受けいれるということは、その人にとってどういうことであるのか」
- 『後書き』が典型。
- もしこれがキェルケゴールの（美的著作の）最大の問いなら、キェルケゴールは最初のメタ倫理学者の一人。

# 「真理」について

- キェルケゴールを解釈する上で「真理」は避けて通れない。
- 19～20世紀の論理学革命。
  - 対応説、整合説、構成説、コンセンサス説、冗長説、

# 最近の注目

- 内在主義 vs 外在主義。
  - 道徳的な理由をもつことは、それを実行する動機をもつことになるか、という問題をめぐる対立。  
(わかりやすい解説は宇佐美(2004))
  - 内在主義: 道徳的な理由を受け入れること、道徳判断に同意することが必然的にそれを行なう動機をもつ。
  - 『あれか＝これか』でも『恐れとおののき』でも内在主義を否定？

# 内在主義・外在主義論争の 関連問題(1)

- 「意志の弱さ」の問題。なぜ正しい道徳判断を下した人が実際にそれを行なわないということがありえるか。
  - 『死に至る病』『罪のソクラテス定義』での議論。先伸ばしにすることによって認識が濁り、意志が屈する。実は意志的な神／善に対する反抗。

# 内在主義・外在主義論争の 関連問題(2)

- アモラリスト(無道徳者)の存在可能性。
- アモラリスト＝道徳判断に(知的には)同意しながらも(あるいは道徳について知りながらも)、それを行なう動機をまったく持たない人。内在主義が真であればアモラリストは存在しえないはず。

# アモラリスト

- 初期キェルケゴールの関心がドン・ジョバンニなどのアモラリストに向けられていたのは明らか。
- ヴィルヘルム判事の課題は、「アモラリストである審美家Aをいかにして説得するか」。
- 逆にとらえれば、「アモラリストが道徳的な動機をもつ理由はあるか」
- 『あれか＝これか』の単純な読みでは、ヴィルヘルムの勧告は、「アモラルであろうとすれば人間は憂鬱や絶望に陥いるため、本当に幸福になることはできない」か？

# アモラリスト

- 宗教的実存はアモラル？
  - 『恐れとおののき』でのアブラハムもひよっとするとアモラルかもしれないという問題。

# 自由と責任

- 非両立論と両立論の争い。責任を問うためには行為者の自由(あるいは他の行為を行なう可能性)が前提とされ、決定論が正しければ道徳的責任は存在しないことになる、か。
- おそらくキェルケゴールの全著作を通じて追求されているテーマ。特に『人生行路の諸段階』の「責めありや-責めなきや」。(自分ではどうすることもできない?)憂愁のために婚約を破棄することになったことについて責任があるか？

# キェルケゴールは？

- キェルケゴールがこの問題についてどう考えていたのかを解釈するのはかなり困難。
- 「自己とは自由と必然の総合だ」といった『死に至る病』の主張の解釈も難しい。
- 現代の倫理学でも難問。

# フランクファートの二階の欲求

- ヒントになりそうなのは、H. Frankfurtの“Freedom of the Will and the Concept of a Person” (1971)での両立論。
- 自由にある行為をするとは、他の行為をする可能性があるということではなく、「Xをしたい」という一階の欲求をもちたいという二階の欲求をもつこと、あるいはそれが自分の意志となることを欲求すること。そしてこれが「人格 person」であることの特徴。

# フランクファートの二階の欲求

- 自らを反省することなく、その時その時で自分の欲求を行動に移す行為者ウォントン (wanton)の問題。人格personとは言えない。
- → 直接的・感性的存在としてのドン・ジョヴァンニの問題。

# 最近の注目

- 2000年前後から感情の哲学や道徳心理学が急速に発展。
- 実験や実証を重視。なぜわれわれが現状の道徳感をもっているかを説明する。
- 道徳判断における感情や気分の重要性の再認識。
- 幸福を阻害するものとしての憂鬱、罪悪感、不安、絶望etcに対する注目。
- ちなみに昔キェルケゴールで論文書いていたRobert C. Solomonも感情の(分析)哲学で大御所になってる。(お亡くなり)
- 実存主義はもう一回アイディアの源泉になるかも！

# 暫定的見通し

- 初期～中期のキェルケゴールの思索は、規範的な議論というより、道徳とはどんなものであるのか、というメタ倫理学的問いに対する格闘と見ることができる。近年の倫理学の成果をふまえて再評価してみることはおそらく生産的。

# 答えたい問い

- キェルケゴールのメタ倫理学上の立場はどのようなものか。あまり見込みのない単純な主観主義でも神の命令説でもないと仮定して、客観的真理が存在するという立場（実在論）であると想定してよいか。内在主義／外在主義論争ではどちらの立場をとるか。
- 自らの永遠の浄福のために信仰をとるべきだ、という単純な説をとっていると解釈してOKか。（おそらくNG）

# 答えたい問い

- キェルケゴールにとって究極的善はなんであるか。(信仰と服従か?)
- もしキェルケゴールがアリストテレス流の徳を中心に思考していたとして(行為者中心的倫理)、彼の徳のリストはどのようなものになるか(信仰、服従、愛、情熱などか?)。また悪徳のリストはどのようなものになるか(特に長期的な自己愛ブルーデンスは悪徳か?)。

# 答えたい問い

- 「自由と必然の総合」は具体的にはどのようなものか？人が責めを負うのはどのような場合か？神がいなければ責めを負うことはないか？

# 応用倫理学

- 具体的な倫理的問題を考える。1970年代から。
  - 生命倫理学: 中絶、安楽死、遺伝子操作、動物etc.
  - 環境倫理学、飢餓、貧困、南北格差。
  - 性差別、人種差別
  - 表現の自由
  - ビジネスエシックス、企業の社会的責任、
  - 戦争、テロリズム、拷問
  - 性倫理と結婚
  - 死刑

# 応用倫理学

- 各種の倫理的概念の分析の場としても機能。
- 責任、権利、責任、「ひと person」、etc.
- 規範倫理学とメタ倫理学共通のバトルフィールドになっている。
- 抽象的なグランドセオリーではなく、より具体的で情熱的な分析と対立。
- おそらく倫理学者は社会的な倫理的問題に対する関心から出発しているので、直接にそういう問題を扱った方が生産的にもなれる。

# 性愛の哲学・倫理学

- 1970年代末から分析系の哲学者も愛や性についての分析をはじめている。
- ポルノ、売買春、性の商品化、フェミニズム etc.
- 心理学者も1970年前後から恋愛の問題に興味をもっている → 恋愛心理学の成立。
- 「愛の哲学者」キェルケゴールも再評価されるべきではないか？ 愛の心理学者、哲学者、倫理学者として？

# リーの愛のタイポロジー（色彩理論）

- John Alan Lee (1971) *The Color of Love*
- エロス（情熱的、美）、ルダス（遊戯）、ストーゲイ（友愛）が三原色。
- エロスとルダスの混合としてのマニア（熱狂的、病的）、ルダスとストーゲイの混合としてのプラグマ（実用的）、ストーゲイとエロスの混合としてのアガペー（自己犠牲的）
- エロスのルダスの実践者としてのドンファン。

# スタンバークの愛の三角理論

- Robert Stenberg (1986) “The Triangular Theory of Love”
- 情熱 (passion)、親密さ(intimacy)、コミットメント(commitment)の三つの要素。三つ揃うと至高の愛。

# 三段階と愛のタイポロジー

- 美的段階: エロスの、ルダスの。誘惑的。
- 倫理的段階: ストーゲイ的、プラグマ的。コミットメントと親密さ。真面目さ、真剣さ。
- 宗教的段階: アガペー。

# 誘惑

- 性的な交渉はどのような場合に道徳的に許容されるか？
- リバタリアン:「十分な判断力のある人々どうしの同意の上でならば」
- しかし、(少なくともエロスの・ルダス的な)恋愛の本質部分には「誘惑」があるのではないか。
- 審美家・アモラリスト・人間通としてのキェルケゴールの出番？アガペーの哲学者ではなくエロスとルダスの哲学者として。

# 結論と提案

- コンテンポラリーな議論にキェルケゴールを位置づけることは不可能ではなさそう。
- アリストテレス的倫理学者として再解釈できるか。
- みんなでがんばって、キェルケゴールの基本的な(倫理学上の)立場をはっきりさせよう！  
(せめて偽名著者がどういう立場なのかぐらいははっきりさせよう)

# 提案

- 実物大のキェルケゴールを見つけよう。
- 二次文献はもっと使おう。研究者間の共通理解を深めよう。
- キェルケゴール研究者以外の議論もおさえよう。(このままだと他の哲学研究者とお話することさえ難しくなる)
- キェルケゴールを擁護して他の派閥に喧嘩を売ろう。
- キェルケゴールを読んで応用哲学・応用倫理学をやろう！
  - 特に愛と性の哲学・倫理学

# 参考文献

- 河上正秀 (2000)、「キルケゴールと倫理: 戦後日本の受容史断面」、『哲学・思想論集』、第26号、筑波大学哲学・思想学系。
- 宇佐美公生 (2004)、「道德の基礎づけにおける内在主義と外在主義」、『岩手大学教育学部研究年報』、第63巻。
- A. Hannay and G. D. Marino (1998), *The Cambridge Companion to Kierkegaard*, Cambridge University Press.
- Russ Shafer-Landau (2007), *Ethical Theory: An Anthology*, Blackwell.